

1年生FS「ビジネスと国際協力」 ～SDGs複数目標の達成に取り組む人々の「セルフ・デベロップメント」～

プログラム概要：PEACE BY PEACE COTTONプロジェクトを事例に、その事業形成と展開に関わってきた人々の想いやこれまでの歩み、取り組み等を知ること、今後の学生生活の過ごし方や進路選択への示唆を得る。

実習先：一般財団法人PEACE BY PEACE COTTON

実習先情報：<https://www.pbpcotton.org/>

参加人数：22名

学部学科：環境システム学科、経済学科、社会福祉学科、グローバルコミュニケーション学科

実習期間：令和3年8月23日～8月26日、8月28日

本学担当教員：山田均

〈はじめに〉

私たちは今回のフィールドスタディーズでインドの綿花栽培について学び、最終日には現地とリモートで繋がり、インドの工場を実際に見学した。

そして、今回の経験を通して私たちが学んだことや考えたことをまとめた。

〈実習内容〉

8月23日(月)9:30-12:30

✓ PBP財団葛西龍也代表理事によるプロジェクト概要とその事業形成過程の紹介

8月24日(火)9:30-12:30

✓ PBPインド事業およびサブプロジェクトの実施にこれまでかかわってこられた人々とかかわることになった経緯、PBPの魅力と今後の実施に向けた課題について聞いた。

8月25日(水)9:30-12:30

✓ 動画「India Untouched」の事前視聴と講義により、インドの不可触民の問題、綿花栽培農家の間に広がる自殺の問題を学んだ。

8月26日(木)9:30-12:30

✓ 原料系としての普及、PBPアプリ開発、ルーラルBPO事業などの準備を進める関係者に、関わることになった経緯と取り組みについて聞き、自らの関与の在り方について考えた。

8月28日(土)9:30-17:30

✓ (午前)高校生向け教育活動の一環として東京都檜原村で綿花を観察、PBP財団稲垣理事のリードのより、綿花の特性と栽培法、檜原村の村おこしの取り組みについて学んだ。

✓ (午後)南インドの縫製工場とライブ中継を行い、実際に生産された綿花が、その後、種取り、製糸、織物の工程を経て辿り着く、縫製の工場の現場と、そこで働く人に都の仕事や生活について学んだ。



檜原村
綿花栽培

タミルナドゥ州
縫製工場



〈提案したこと・私たちにできること〉

✓ フェアトレード商品を買う

✓ エコバッグを買い、ビニール袋の使用を減らす

✓ オーガニックコットンの商品を買って、使用することで周囲の人に広める

✓ 就職すると、仕事が忙しくなるので、学生のうちにボランティアに積極的に参加する

〈経験したこと〉

PBPコットンプロジェクトの講義で、服を作る工程の複雑さ、その工程の中で苦しんでいるインド人を助けること、そのインド人を助けるために人と人のつながりが大切だとを学んだ。そして何より今後大切にしたい言葉を学べた。それは、

「目の前の困っている人を助けたい、そのために自分たちにできることをやるのみ！すぐに動く、本気で取り組む！」である。

これは人を助けるプロジェクトの計画にしても、本気ですぐに行動することが大事だと思い知らされた言葉であった。インド人のカースト制度に関する動画を見て心が痛んだ。また、インド工場内の見学の際に3人の女性に「夢はありますか？」とインタビューをした。彼女たちは「兄弟姉妹の勉強のためにお金を稼ぐこと。」と答えた。私は、やっぱり自分のための夢を持ってほしいと思った。だから、綿から人々を幸せにするPBPコットンプロジェクトのように、自分ならどうやって人々を助けて幸せにするかを考えることを学べた。

〈今後の展開、今後の学び〉

- ✓ 個別の加害体験はなくても、アクションを起こさずに見ていることは立派な差別である
- ✓ 大切なのは、寄付ではなく、投資という視点で誠実さを持って関わること
- ✓ どんなにお金があっても、支援は終わらない

—PBPの活動は今、綿花栽培にとどまらず、IT産業にも一歩踏み出している。今後はインドの人々がITにおける重要な役割を果たし、日本や世界中とのオンラインを通じた交流も活発になっていくだろう。

✓ 買うことで参加者になる

私たちは、実行することの重要さとそこから生まれる新たなつながりの尊さに触れることができた。これからの学びは実践になる。商品の購入・使用から周囲の人にPBPの活動について知ってもらうことが私たちの使命だろう。

フェリシモの運営する通販サイト

「haco!」で販売されているPBPの商品と寄付を証明するタグ。100%オーガニックコットンで作られており、肌触りもとても良い。他にもたくさんの商品が販売されている。



PBPの商品



PBPの寄付を証明するタグ

〈まとめ〉

今回のフィールドスタディーズは非常に貴重な体験であった。国際的に問題視されている事柄に対して、日本国内、海外を問わずにグローバルに活動されている方々の話を聞くことができた。また、私たちの生活に欠かせない洋服の成り立ちを美化されていない状態を知ることができた。

PBP慈善団体の活動がより一層社会に認知され、活動が行いやすい状況が広がり、理解が得られ、協力者・支援者が増えることが重要になってくると感じた。

対して、私たちは正しい情報とそれに伴っていると考えられる事柄を知った上で行動し、目に見えないつながりがあることを忘れてはならない。需要を生み、供給してもらっている私たち消費者全体が考えていくべきことだと思う。

「ビジネスと国際協力」～SDGs複数目標の達成に取り組む人々の「セルフ・デベロップメント」～

プログラム概要	: PBPコットンプロジェクトについて
実習先	: 一般財団法人PEACE BY PEACE COTTON
実習先情報	: https://www.pbpcotton.org/
参加人数	: 22人
学部学科	: 環境システム学科 教育学科 人間科学科
実習期間	: 令和3年8月23日～8月26日、8月28日
本学担当教員	: 山田均

○はじめに

私たちが普段、着用している衣類の生産に大きく関わっているインドの綿農家の現状をご存じでしょうか。現在、インドでは綿農家の高い自殺率が問題となっています。農薬や化学肥料を借金をして買うものの、適切に使用できなかつたり、そもそもその土地に合っていなかつたりと無駄になってしまうケースが多いといえます。その結果収穫量が減り、借金を返せなくなつてしまい、自殺に追い込まれてしまうそうです。また、児童労働も大きな問題となっています。子供の頃から労働に駆り出されることで教育を十分に受けることなく大人になってしまうため貧困が解決されることはなく悪循環を起こしてしまいます。こうした問題に対処し、インドの持続可能な社会の実現に向けて立ち上がったのが今回学習したPBPコットンプロジェクトです。この記事では私たちが本プロジェクトにについて学習し、考えたことについてまとめました。

○実習内容

【一日目】

講義の前半ではPBPコットンプロジェクト概要とその事業形成過程についてPBP財団代表理事の葛西さんにお話を伺い、後半では事業関係者の稲垣さんから綿花について学びました。その後各グループごとにそれぞれ意見を出し合いました。私たちのグループではインド農家の自立が難しいため、資金確保のために買い手を増やし、教育制度の改革が今後取り組むべきことだと結論づけました。私たちにできることとしてはオーガニックコットンを理解し多くの人に知ってもらい、企業に商品の販売を求められることができました。

【二日目】

PBPインド事業及びサブプロジェクトの実施にこれまで関わって来られた人々に、関わることになった経緯、PBPの魅力と今後の実施に向けた課題についてお話を伺いました。学校でコットンを栽培し生徒の関心を広げていることやインドの女性が刺繍を教わる背景などを学びました。

【三日目】

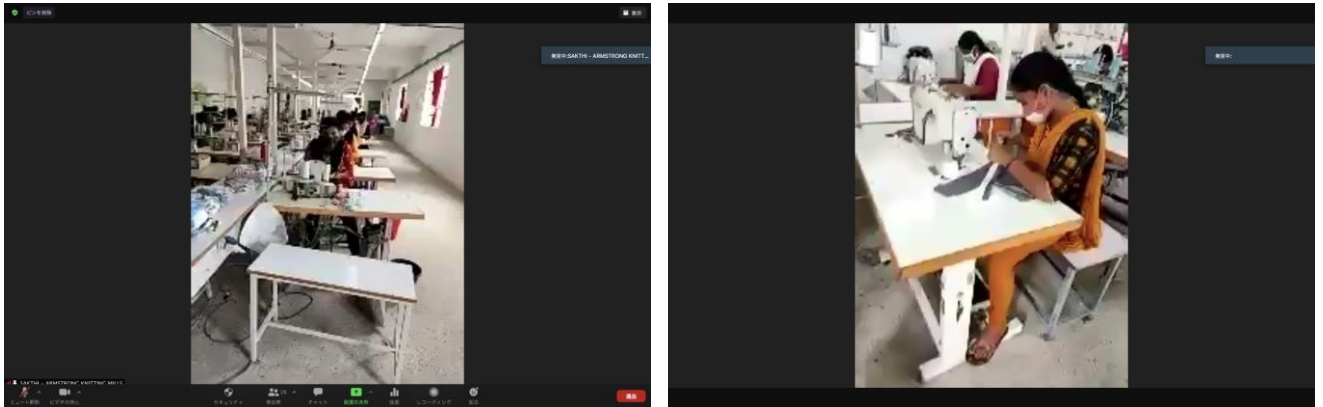
インドの不可触民問題と綿花栽培農家の間に広がる自殺問題について、それぞれお話を伺いました。農民自殺問題の背景に、文字が読めないため偽薬を買わされ借金を負うなど、教育問題が関与していることを学びました。そのため、自殺者数を減らすには教育格差を解消することとも繋がると考えました。

【四日目】

PBPプロジェクトが今後のために原料系として普及させる、PBPのアプリ開発、ルーラルBPO事業などの準備を進めている関係者の石塚さん、笹間さんに経緯や取り組みについてお話を伺いました。基金付きオーガニックコットン製品の販売の利点、普段は学ぶことの出来ないアプリ開発やIT企業の裏側を学びました。

【五日目】

午前、午後の二部構成でした。午前の部では東京都檜原村と中継を繋ぎ、綿花栽培についてお話を伺いました。檜原村の関係者の方各グループごとに質疑応答の場が設けられ綿花の特性や栽培方法、檜原村の村おこしの経緯について細かく学びました。午後の部では南インドの縫製工場とライブ中継を行い、縫製工場の活動の現場を見学しました。その後、工場に働いている方と質疑応答を行い、インドの人々の生活や仕事について学びました。講義の最後では各グループごとにSDGs実現のために私たちが今後どのようなキャリアを積むべきか、そして大学生の私たちでもできることを考え、まとめました。



インドの縫製工場の様子

○提案したこと、発信したこと

PBPコットン財団が行う事業を知る・学んだうえで、プロジェクト拡大のために必要なことや私たち大学生ができることを具体的に提示した。

『インドでのオーガニックコットン生産者を増やすためには、買い手を増やす必要がある。』

買い手を増やすために必要なことは？→オーガニックコットンの存在を知ってもらうこと

そのためにPBPコットン財団ができることは？→様々な手段を使用した広報活動

EX]プロジェクト参加者と連携して行う広報活動、SNSやインターネットを活用した広報

、賛同企業を増やすこと

私たちができる広報活動→多くの人間の目に留まる場、SNSへの投稿

EX]若者のトレンドを踏まえた内容、ファッションの知識と融合した投稿

○まとめ

今回、4回の講義でインドの現状や歴史とPBPコットン財団の沿革と現在の課題に至るまでとオーガニックコットン栽培のメリットデメリットと課題などを教えていただきました。その後5日目には、檜原村とインドのオーガニックコットン加工工場をオンラインツアーという形で見学し、こちらからの質問にも答えていただきました。

PBPコットン財団の取り組みは基本的に、最終的にインドのコットン農家の方々が安定的な収入を得て経済的な日々の不安から解放されて自立することを最終目的にしていることがわかりました。そのため、基本的には利益率を重要視していないものが今のところは多かった印象を受けました。

私たちは1、2学期にSDGsの授業は受けていたものの、SDGsの概念や取り組みに関して調べたり講義を聞くようなものばかりだったので元々の知識がなくても特に困ることはありませんでした。しかし今回の講義はSDGsに関する知識やインドに関する知識、コットンに関する知識や社会の仕組み会社の仕組みに関する知識が一定以上必要に感じたと思いました。